第30回歯科衛生研究会

平成21年3月

講演抄録集

日　時　／　平成21年3月4日（水）午後4時30分

会　場　／　日本歯科大学新潟生命歯学部アイヴイホール

日本歯科大学新潟短期大学

歯科衛生研究会

会　　長	小菅直樹
副　会　長	近藤敦子、宮崎晶子
実行委員長	高橋正志
企画担当	浅沼直樹
企画運営委員	佐藤律子、土田智子、三富純子
庶務渉外委員	筒井紀子、原田志保、坂井由紀
事務担当委員	元井敏晴

［一般講演・講演者の方へ］

1）コンピュータで投影をする方は、発表データをＵＳＢフラッシュメモリーまたはＣＤ－Ｒにてご持参ください。

2）当日午後2時30分から、コンピュータ投影テストおよび予備ノートパソコンへのデータの保存を行いますので、データを持ってお集まりください。

3）一般講演の発表時間は8分（予鈴7分で青ランプ、終鈴8分で赤ランプ）、討論時間は4分です。

4）その他のお知らせ事項は、当日受付で致します。

第30回　歯科衛生研究会プログラム

日時　平成21年3月4日（水）16時30分～19時51分

会場　日本歯科大学新潟生命歯学部　アイヴイホール

＜16:30-16:35＞

「開会の辞」

シンポジウム：『 Professional への道 』

座長　夏野徹也

＜16:35-17:05＞

1．若者のキャリア教育　～技能五輪に華開く若き人材の育成～

渡辺弘子（にいがた製菓・調理師専門学校えぷろん・学園長）

＜17:05-17:35＞

2．電卓日本一の挑戦、計算にかける思い

藤田麻衣子（学校法人新潟総合学院　新潟会計ビジネス専門学校）

＜17:35-17:55＞

総合討論

＜17:55-18:10＞

感謝状の授与・休憩

一般講演

座長　藤田浩美

＜18:10-18:22＞

1．重度歯周炎患者への基本治療について

○菊地ひとみ[1]、安川俊之[2]、中村俊美[2]

（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟病院総合診療科）

＜18:22-18:34＞

2．シェードテイキングにおける測色計の有効性

○山際清香[1]、海老原隆[2]、若木　卓[2]、鈴木雅也[3]、相方恭子[4]、浅沼直樹[5]、佐藤治美[5]

（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟生命歯学部歯科保存学第2講座、[4]新潟病院歯科衛生科、[5]新潟短期大学）

<18:34-18:46>

3．模擬授業における学生評価と自己評価の比較

○小林えり子[1]、宮崎晶子[2]、佐藤治美[2]、土田智子[2]、原田志保[2]、石井直子[2]、繁野真樹[2]、中村直樹[2]

([1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学)

<18:46-18:58>

4．「白い歯外来」における症例数の調査

○折笠允子[1]、海老原隆[2]

([1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟病院総合診療科)

座長　拝野敏子

<18:58-19:10>

5．歯科診療で用いるグローブについて

○星香菜子[1]、夏野徹也[2]、三上正人[3]、土田智子[2]、中村直樹[2]

([1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学、[3]新潟生命歯学部微生物学講座)

<19:10-19:22>

6．「仕上げ磨き」の現状

○佐藤由姫[1]、佐々木典子[2]、八子祥子[2]、小菅直樹[3]、宮崎晶子[3]、小島功嗣[4]大野裕美[5]

([1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟病院歯科衛生科、[3]新潟短期大学、[4]新潟病院矯正歯科、[5]新潟病院小児歯科)

<19:22-19:34>

7．ヒトの大臼歯の髄室床底にみられる髄管の形成過程に関する一考察

○高橋正志[1]、森　和久[2]、又賀　泉[2]

([1]新潟短期大学、[2]新潟生命歯学部口腔外科学第２講座)

<19:34-19:46>

8．歯科衛生科の自主組織による業務活性化活動

○高野貴子[1]、坂井由紀[1]、関根千恵子[1]、佐々木典子[1]、鈴木明子[1]、藤田浩美[1]、池田裕子[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]

([1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科)

<19:46-19:51>

「閉会の辞」

シンポジウム：「 Professional への道 」
若者のキャリア教育
～技能五輪に華開く若き人材の育成～

にいがた製菓・調理師専門学校えぷろん
学園長　渡辺　弘子

○私がとった教育方針は、明確な目標をもたせる一つの方法として製菓・調理関連の各種コンテストに参加させることであった。技能五輪国内大会（洋菓子部門）が本校会場に行われたことを機会に、積極的に学生へ大会への挑戦を呼びかけた。技能五輪、国際ジュニア、ジャパンケーキショーグルメピック(調理技術)等々へ早朝・放課後・夏休みに一生懸命練習を展開した。普段の授業中には見られない学生の真剣な様子にはただ驚嘆するばかりであった。

○2007 技能五輪国際大会(静岡)洋菓子部門で本校大島選手が金メダル(世界一)を獲得した。普通の高校生がえぷろんへ入学し、指導者に素直に従い、金メダルを獲得するという一途な精神力がこれまで成し得なかった世界一につながったのである。

○各種コンテストの活躍は、出場選手だけに終わらず、学生全体の専門的知識・技術力向上につながったのである。昨年秋の製菓衛生師国家試験に100％合格、就職戦線厳しい中で「えぷろんの学生ならとりたい」、学生の間に「やればできる」という自信等々と波及している。

○若い人材の育成には、甘いことばで誉めたたえてばかりいても駄目、怒る・しかるばかりでも駄目、夢や目標をしっかり持たせ辛抱強く育てることが肝要ではないだろうか。

シンポジウム：「 Professional への道 」
電卓日本一の挑戦、計算にかける思い

学校法人新潟総合学院
新潟会計ビジネス専門学校　　藤田　麻衣子

当校新潟会計ビジネス専門学校、通称「ＮＡＢＩ」は、医療・経理・販売・情報・秘書のスペシャリストを目指すビジネスの専門学校である。そんな当校が毎年日本一を目指し、ビジネス系専門学校の頂点を達成し続けていることがある。それは「全国電卓競技大会」(全国経理教育協会(文部科学省後援)で６年連続１２回目となる全国優勝を達成していることだ。

電卓競技大会とは、電卓計算能力検定試験の段位の問題を電卓で解き、競いあう。乗算・除算・見取算・複合算・伝票算という５種目を各１０分間合計５０分間計測し、個人は高得点の上位３名、団体はメンバー３人の合計得点が高いチームから決定する。

予選大会は関東地方会に属し、その後全国大会が行われているが、今年その予選大会で準優勝というまさかの結果となった。

今回、全国大会までのリベンジにかける学生自身の思い、日々の練習過程やプレッシャーを乗り越え全国No１を達成したメンバーを監督として、そして同じ経験をしてきた先輩として紹介したい。

そして、「目標を持ち続け、努力し続けること」を職業問わず、日々前向きに過ごしていけるよう思っていただければ幸いである。

重度歯周炎患者への基本治療について

新潟短期大学専攻科　○菊地ひとみ
新潟病院総合診療科　安川俊之、中村俊美

【緒　言】現在、歯周病は生活習慣病として位置づけられ、個人の生活習慣によってその発生・進行が大きく左右される。私たちは、歯周病患者にセルフケアの大切さを説明し、これまでの生活習慣の改変を提案するが、その協力を得るのは容易なことではない。特に重度歯周炎患者の場合、患者の性格や生活環境、口腔状態などを理解し、個人にあった歯周基本治療を行う必要がある。歯周基本治療をスムーズに進めるためには、患者を診る十分な知識と技術はもちろんのこと、指導内容を的確に患者に伝えることが重要であると実感し、コミュニケーションスキルの向上が必要であると痛感した。そこで今回、歯科衛生士２年目の私が、初めて担当した重度歯周炎患者のプラークコントロールの際に学んだこと、そして、どのように患者とかかわったのか、振り返り報告する。

【症　例】
患　者：６６歳　男性
初診日：平成１９年１０月３１日
主　訴：インプラント希望
家族歴：特記事項なし
既往歴：尿酸値が高く、心筋梗塞のため治療中
現病歴：左下歯周病にて抜歯し、欠損

【治療計画】患者は、インプラント治療を希望しているが歯周精密検査により口腔清掃不良、重度歯周炎を認めるため、まずは、PCR 値１０％台を目標として歯周基本治療を開始した。

【考　察】歯周組織検査、口腔内エックス線写真（以下写真像）より臨床診断は、広汎型慢性歯周炎とした。多数の４mm以上ポケットデプス、写真像において垂直性骨吸収を認めるため、口腔内状態の立体的構築が重要と考え、写真像を自分でトレースし書き込みをした。このトレースにより垂直的骨吸収、歯肉縁下歯石の付着部位を立体的に確認し、患者に対する治療説明ならびにスケーリング・ルートプレーニングをスムーズに行えた。しかし、患者が胃癌手術のため治療を中断し、半年後に再来院した。入院後のプラークコントロールのバックアップは、入院前の基本治療において歯石のみならず不良充填物・補綴物等のプラークリテンションファクターを患者と共に１歯単位で解決するアプローチを行ったため、スムーズに行えた。また、患者は胃切除により食生活が変化しており、そのことを考慮した新たな生活習慣に即したセルフケアの指導を現在行っている。

シェードテイキングにおける測色計の有効性

新潟短期大学専攻科　○山際清香
新潟病院総合診療科　海老原 隆、若木 卓
新潟生命歯学部保存２　鈴木雅也
新潟病院歯科衛生科　相方恭子
新潟短期大学　浅沼直樹、佐藤治美

【目　的】歯の審美性に対する関心や意識の高まりとともに『歯をきれいにしたい』といった主訴が増加傾向にある。審美性を決める大きな要素の一つに“色調”が挙げられる。従来から、歯科治療における歯の色の測定方法にはシェードガイドを使用して肉眼によって識別する『視感測色法』が主に行われている。しかし、術者の個人差や経験、測色時の環境や条件に左右されやすく、誤ったシェードを選択することも少なくない。そこで、統一した条件下で光学的に直接測定して数値で記録できる歯科用測色計が『物理的測色法』として応用されはじめている。本研究では漂白処置におけるシェードテイキングを肉眼による『視感測色法』と歯科用測色計「Crystaleye®」（オリンパス）を用いた『物理的測色法』の２種類で行い比較・検討した。

【材料および方法】
１、被験歯：被験者は筆者１名（女性 22 歳）で、被験歯は齲蝕および修復物のない1]とした。
２、漂白方法：漂白は、4+4（計８歯）に対してリザーバーを付与したカスタムトレーを用いてホームブリーチングを行った。漂白剤は 10％過酸化尿素含有ジェル（ハイライトシェードアップ®：松風）を用い、就寝中（約６～７時間）、３週間漂白を行った。
３、測色方法：漂白開始前（ベースライン：BL）、１、２、３週間の時点で以下に示す方法で行った。
①『視感測色法』：被験者本人が VITAPANClassical®（VITA Zahnfabrik）を用いて歯冠中央部のシェードを選択し、口腔内写真を撮影した。
②『物理的測色法』：Crystaleye®を使用して歯冠を撮影し、シェードを測定した。

【結　果】シェードテイキングの結果は BL、１、２、３週間の順に、『視感測色法』では C1、A1、B1、B1、『物理的測色法』では B2、A1、A1、A1 であった。BL、２、３週で異なる判定となった。

【考　察】測色計の使用手順は難しいものではなく、記録したデータ分析も専用ソフトで簡便に行うことが可能である。しかしながら、誤った使用方法で撮影した場合、測色計でも違うシェードが選択されることもあるため、機種を熟知して正しく用いることが大切である。また『視感測色法』と『物理的測色法』を併用することでより正確なシェードテイキングが可能になると思われた。

模擬授業における学生評価と自己評価の比較

新潟短期大学専攻科　○小林えり子
新潟短期大学　宮崎晶子、佐藤治美、土田智子
原田志保、石井直子、繁野真樹
中村直樹

【緒言】専攻科２年制コースのカリキュラムには、教育現場における実践的能力及び自己教育力を形成することを目的とした「教育研修」がある。

教育研修では、短期大学第１学年を対象として、専攻科１年次は歯科診療補助実習、２年次は歯科予防処置実習と歯科保健指導実習にインストラクターとして参加している。２年次の歯科保健指導実習では、授業の１単元を受け持ち、「ベッド上での口腔ケア」という模擬授業を行った。模擬授業は専攻科生の３人で、学生 20 人ずつ３ローテーションの組分け実習とした。今回インストラクターとしての自己評価と学生による授業評価を行い、若干の知見を得たので報告する。

【方法】授業終了後、本学授業評価に用いる「学生による授業評価」及び「教員の自己授業評価」のマークシートを用いて、集計を行った。評価項目は「授業方法」「授業の計画・準備」「教育に対する意欲・態度」「学生の反応・意欲」に関連する 13 項目である。評価は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の５段階とした。

【結果】模擬授業の総合平均は学生評価が 4.8、自己評価 3.8 であった。学生による授業評価と自己評価が最も一致していたのは、「教育に対する意欲・態度」に関する３項目の平均で、学生評価 4.8、自己評価 4.7 であった。また、最も違いがみられたのは「授業方法」に関する３項目の平均で、学生評価 4.8、自己評価 3.0 であった。

【考察】最も一致していた「教育に対する意欲・態度」に関しては、今回 20 人ずつの組分け実習であったため、全員に対して一人一人に気を配り、指導することができたためと考える。最も違いがみられた「授業方法」では、特に声の大きさや話し方について差が認められた。普段は基礎実習室で実習を行っているが、今回使用した介護実習室はその半分の大きさであったこと、１回の人数がいつもの３分の１であったこと等から、自分が感じていたよりも学生にとっては聞き取りにくくなかったように思われる。

全体的な数値としては、学生評価の方が上回っており、授業に対する学生の印象は予想していたよりも良かった。しかし項目別の評価値をみていくと、話し方の明瞭さなど、改善するべき点も多い。今後の学生教育に今回の経験や反省点を活かし、さらに向上していきたい。

「白い歯外来」における症例数の調査

新潟短期大学専攻科　○折笠允子
新潟病院総合診療科　海老原隆

【目　的】近年、審美性への関心の高まりと共に、歯を白くしたいと希望する患者が増えてきている。また、2007 年から始まった、歯科衛生士のためのホワイトニングコーディネーターも、今や全国で 3000 人を超え、さらに倍増する勢いで増えている。これらに加え、全国で歯学部がある 29 の大学の付属病院の中で、審美歯科関係の専門外来を開設し、専門的な治療を行っている病院が１５大学あり、約半分も存在する。このように、大学病院に審美歯科関係の専門外来が増えてきているというような事からも、審美への高まりが、患者・歯科の医療従事者ともにうかがえる。私自身も審美歯科について興味があったということもあり、大学病院では、どの程度の患者が審美歯科を受診するのかという疑問を持ったため、日本歯科大学新潟病院の「白い歯外来」に受診した患者の性別、処置の内容による症例数の調査を行った。

【対象および方法】　日本歯科大学新潟病院「白い歯外来」において 1998 年 4 月より 2008 年 12 月までの約 10 年間に受診した患者で、各年度の処置内容による症例数の調査を行った。（1998 年-2005 年までは、海老原らの“日本歯科大学新潟病院「白い歯外来」における生活歯漂白の現状”の論文より引用）

【結　果】10 年間における合計は 502 症例であった。処置内容の内訳は、説明のみが 74 症例（14.7％）、歯面研磨が 31 症例（6.2％）、失活歯漂白が 76 症例（15.1％）、生活歯漂白 163 症例（32.5％）、その他の修復処置が 98 症例（19.5％）、きれいな歯ぐき関連が 60 症例（12.0％）であった。また、男女の受診数は、男性が 121 名（24.1％）、女性が 381 名（75.9％）であった。年代層別では、20-29 歳が最も多く、193 名（38.4％）、次いで 30-39 歳が 117 名（23.3％）、40-49 歳が 65 名（12.9％）、50-59 歳が 50 名（10.0％）、10-19 歳が 45 名（9.0％）、60 歳以上が 29 名（5.8％）、0-9 歳が 3 名（0.6％）であった。

【考　察】男女比では、女性の方が圧倒的に多く、約 80％を占めていた。やはり、審美への関心に対しては、男性より女性が高いのはいうまでもないことであろう。また、年齢層別では、20 代が最も多く、30 歳代を含めると約 60％を占めており、20 代から 30 代の女性が審美に対して最も関心が高い層であることが言える。

歯科診療で用いるグローブについて

新潟短期大学専攻科　○星　香菜子
新潟短期大学　夏野徹也、土田智子、中村直樹
新潟生命歯学部微生物学講座　三上正人

【目　的】歯科診療を行うにあたって、グローブは不可欠である。そのグローブが商品として発売に至るまでには、あらゆる試験が規定以上の水準でなくてはならない。歯科診療で頻用される未滅菌グローブについての試験項目はピンホールや寸法、物性といったものでグローブに付着する細菌については検査水準を定められていない。そこで今回、医療現場で使用されている未滅菌グローブに付着する細菌数および保管方法について検討したので報告する。

【方　法】実験１：保管方法の違いによる細菌の有無。①壁掛け（以下Ａグループ）、②水平（以下Ｂグループ）、③水平＋手洗い場付近（以下Ｃグループ）の３つの方法で短大基礎実習室内にグローブを設置した。実習終了後に、グローブ箱内の最上面のグローブをＢＨＩ液体培地に入れ、３７℃で２４時間培養後、液体の濁りの有無で細菌の存否を確認した。

実験２：製品による汚染度の比較。開封前の５社の製品について、実験１同様の方法で比較した。さらに汚染が見られた一般医療機器分類のもの（以下Ａ社）と、未分類のもの（以下Ｂ社）の２社の製品を選択し、グローブ表面に付着している細菌をＢＨＩ寒天平板培地を用いてコロニー形成菌数を比較した。

【結　果】

実験１：保管方法と細菌の検出率には関連性はなかったが、Ｃグループの細菌検出率が最も高い傾向にあった。

実験２：５社のうち３社の製品には汚染は見られず２社の製品には汚染が認められた。汚染のあった２社のうちＢ社の製品におけるコロニー形成菌数が有意に多かった

【考　察】実験１の結果から、Ａグループの細菌検出率が低い傾向にあることが分かった。上部からの埃の侵入を防ぎ乾燥状態の保てる壁掛け設置がより衛生的に保つ方法であると考えられる。実験２の結果より、未滅菌のグローブであっても、新品の状態では細菌汚染のない製品もあることが分った。また、一般医療機器として扱われているか否かにより、細菌数に有意差があったことから、グローブ購入の際、用途に適したものを購入する重要性が示唆された。

「仕上げ磨き」の現状

新潟短期大学専攻科　○佐藤由姫
新潟病院歯科衛生科　佐々木典子、八子祥子
新潟短期大学　小菅直樹、宮崎晶子
新潟病院矯正歯科　小島功嗣
新潟病院小児歯科　大野裕美

【目　的】

小児への仕上げ磨きの必要性は認知されており、通常小児本人および育児者に口腔清掃指導が行われている。仕上げ磨きについての手法は研究がなされているが、磨き残しの多い部位や指導しても改善されにくい部位等の具体的なデータについての報告は殆ど見当たらない。そこで指導医・指導歯科衛生士のもとに、アンケート・検査・指導を実施し、仕上げ磨きについて、若干の知見を得たので報告する。

【対象および方法】

対象は日本歯科大学新潟病院小児歯科、矯正歯科に通院中の小児 11 名（男児４名、女児７名）と育児者９名で、事前に説明を行い同意が得られたものとした。小児の年齢は３～６歳とした。

方法は仕上げ磨きに対するアンケートを行った後、聞き取りおよび歯垢染色とプラークチャートを記録し集計を行った。

【結　果】

アンケート・聞き取りで、「仕上げ磨きを行っていますか？」の項目では「はい」と回答した者が 100％であった。また「仕上げ磨きについて感じていることをご自由にお書きください」の項目では「奥歯が磨きづらい」と回答したものが最も多く 37％であった。平均 PCR 値は 21.3％で、部位別に見ると上顎前歯部唇側では９人、上顎右側臼歯部頬側では８人、下顎右側臼歯部舌側では８人にプラークの残存が認められた。

【考　察】

部位別でプラークの残存が多く認められた下顎舌側臼歯部では、アンケートおよび聞き取りでも「奥歯が磨きづらい」と感じている育児者が多かった。このことは、歯ブラシを臼歯部に近づけると舌に押されるなどして磨きづらかったことが理由として考えられる。

今回の研究から、指導するにあたっては舌の排除の仕方や、頬側臼歯部を磨く際の頬粘膜の排除の仕方などの指導を行うことが効果的であると考えられる。

ヒトの大臼歯の髄室床底にみられる髄管の形成過程に関する一考察

新潟短期大学　　○高橋正志
新潟生命歯学部口外２　森　和久、又賀　泉

【目　的】分岐根の髄室床底には、歯根膜腔と歯髄腔をつなぐ細管がみられ、髄管と呼ばれ、歯髄炎や歯根膜炎の相互の拡大経路となることが知られている。今回は、ヒトの大臼歯の髄室床底にみられる髄管の組織構造を詳細に検討し、髄管の形成過程について考察した。

【材料と方法】抜去後、ただちに10％中性ホルマリンで固定した、ヒトの大臼歯を使用した。髄管を含む頬舌側および水平方向の研磨標本を作製し、偏光顕微鏡とマイクロラジオグラフィーで観察した。樋状根を形成途中の髄室床底を、水洗、アルコール脱水し、臨界点乾燥したのち白金蒸着を施し、髄下葉の底面をS-800型走査電顕（日立）で観察した。

【結　果】樋状根を形成途中の髄室床底の底面を走査電顕で観察すると、エナメル真珠のほかに、島状の隆起部が観察された。この隆起部の表面には凹凸がみられ、多数の小孔が観察された。隆起部と周囲の象牙質の表面に存在した多数の小孔は、象牙細管よりも太く、壁がみられることもあった。歯周病により根分岐部まで露出した大臼歯の、頬舌側方向の研磨標本を偏光顕微鏡で観察すると、髄室床底ではセメント質がかなり厚く、表面に陥凹がみられ、セメント質中に管状の空隙がみられることが多く、髄室床底の象牙質内表面にはきわめて厚く修復象牙質が形成されていた。同一歯の髄室床底の原生象牙質を通る水平方向の研磨標本をマイクロラジオグラフィーで観察すると、髄管周囲にX線透過性の歯質変化や、髄管の輪郭に沿ったX線不透過性の薄層がみられた。

【考　察】髄室床底の底面にみられた島状の隆起部は髄下葉と考えられ、壁のみられた多数の小孔は血管の残遺物と推察される。歯胚の時期に歯乳頭と歯小嚢をつないでいた多数の血管が、樋状根の髄室床底形成初期の髄下葉中に埋め込まれるが、大部分は髄室床底形成途中に途絶え、少数の血管のみが歯髄側まで到達して、髄管を形成すると考えられる。分岐根の髄室床底のセメント質は厚いが、管状の空隙が含まれることが多く、象牙質中にも髄管が含まれるので、根分岐部の露出による刺激がこれらの管状の空隙や髄管を通って容易に歯髄の象牙芽細胞まで伝達されるために、髄室床底の象牙質内表面にはきわめて厚い修復象牙質が形成されると推察される。

歯科衛生科の自主組織による業務活性化活動

新潟病院歯科衛生科　○高野貴子、　坂井由紀
関根千恵子、佐々木典子
鈴木明子、　藤田浩美
池田裕子、　三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【目的】近年、医療技術の高度化・多様化、そしてインターネットなどマスメディアによる情報の氾濫により、歯科衛生士を取り巻く環境は変化してきている。それに対応するため、個々の知識・技術のレベルアップはもちろんのこと、歯科衛生科として意識改革を行う必要がある。その第一歩として病院の運営や危機管理に対し、積極的に貢献し、さらに、他機関への情報発信・交換を図ることを目的として、平成２０年４月１日より自主的な組織を編成し活動を開始した。

【活動内容】活動参加者は就業１年目を除く歯科衛生士３３名とした。

活動支援の目的別に、患者サービス向上、リスクマネジメント、院内感染防止対策、歯科治療・材料、口腔ケア、学術・研究、教育の７グループを編成した。各グループが、歯科衛生科の長期目標（５年）及び、短期目標（１年）を設定した。短期目標は、長期目標を達成するためのステップとして、また、軌道修正を行い易いように設定した。そして、各グループは、年間活動計画を立案し実行に移した。

【活動結果】１年間の活動を各グループが年間計画通りにほぼ実施でき、わずかではあるが個々の意識・行動の変容も見られ、充実した活動ができたと考えられる。一方で、以下のような反省点・改善点も報告された。月１回のラウンド時に、評価者の時間的制約により十分な客観的な評価やフィードバックを行えなかった。反省点・改善点を提示したが、臨床現場ではそれが活かされなかった。計画の実施に無理があった。要望に答えきれなかった。活動に対する一人一人の意識に温度差があったことがあげられた。

【考察】歯科衛生士が自主的に立ち上げ、目標設定・計画立案から、実際の活動に至るまでを一人一人が自ら考え、行動することによって、前向きに意識・行動の変容が促されたと考えられる。しかし、個々の活動開始時のモチベーションの高さが違うことから、若干の温度差が生じたのも事実である。

今後も、初年度の反省や改善点をふまえ、そして歯科衛生士として、新潟病院の一員としての自覚を持ち、活動を続けていきたいと考えている。

次回の「歯科衛生研究会」は平成21年7月15日に開催する予定です。
多数の講演の申し込みをお待ちしています。